

への認識を深め、生徒一人ひとりの自覚と判断力を高める指導を推進するための資料として生かしたい。私たちの目ざす本来の実践的研究は、むしろこれから始まるのである。

(注) 米山 誠・原 幸宏「自主性と規律の指導における基本的な課題」(『名大教育学部附属学校紀要第29集, 1984』)

〔2〕授業態度について

安井 弘美 川田 基生

生徒の授業に対する学習態度は、学習活動の中で基本的、かつ最も重要な要素である。本人の態度の良否は、学習事項の理解度に大きく影響するだけでなく、他人の学習姿勢にまで影響を及ぼし、クラス全体の学習雰囲気を決する大きな問題であることは容易に想像できる。そこで本校生徒の授業態度の実態を把握するため1・2年の中・高生を対象にし、次の4項目についてアンケート調査を主体にして調査を行った。

①授業の様子、②本人の授業を受ける態度、③授業内容の理解度、④授業が騒がしくなる原因、④については記述式で自由に記入してもらった。

①授業の様子については、次のア～キの中から該当するものを○印で選択させた。

- ア. 楽しく、よい雰囲気である。
- イ. よく質問し、活発に意見交換が行なわれる。
- ウ. 熱心に授業をきき、静かである。
- エ. 先生が厳しいので、静かである。
- オ. 静かであるが、他の勉強などをしている。
- カ. おしゃべりが多く、騒がしい。
- キ. 騒がしい上に、勝手なことをしている。

その結果、それぞれの記号を選択した者の割合は、中・高生および全体として次の様な百分率であった。

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ
中学生	23%	6%	5%	8%	3%	43%	12%
高校生	22	1	7	11	10	32	17
全体	23	4	6	9	7	37	14

②本人が如何なる態度で授業を受けているかについては上の①のア～キの中から該当するものを○印で選択させた。その結果、中・高生および全体として次の様な百分率となった。

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ
中学生	17%	4%	27%	16%	9%	25%	2%
高校生	17	0	33	14	14	17	5
全体	17	2	30	15	11	21	4

③授業内容の理解度について次のア～カの中から該当するものを○印で選択させた。

- ア. ほとんど理解できる。
- イ. ある程度理解できる。(70%)
- ウ. 半分くらい。
- エ. 少ししか理解できない。(30%)
- オ. ほとんど理解できない。
- カ. わからない。

その結果、次の様になった。

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
中学生	12%	40%	41%	5%	2%	0%
高校生	5	33	38	11	7	6
全体	8	36	39	8	5	4

以上のアンケート調査結果について以下に考察を試みることにする。

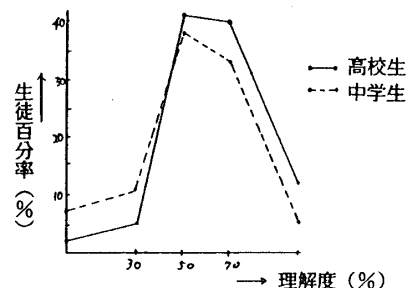
授業が静かで、良い雰囲気のもとに行なわれていると感じている者は4割しかいない(①のア、イ、ウ、エ)のに対し騒がしいと感じている者は50%ほどもいる(①のカ、キ)。一方、約7割近くの者が自覚して熱心に取り組んでいる(②のア、イ、ウ、エ)のに、実際は約半数の者が授業が騒わがしいと感じとっている(①のカ、キ)。この一見矛盾する関係は、実は約3割近くの者が自ら騒わいでいることを認めている(②のカ、キ)が、大半は雰囲気に連られて騒がしくしているだけで、むしろ問題なのは4%の者(②のキ)が騒がしさの根源をなしていると思われる。そのため約半数の者が授業中、騒がしいと感じているのであろう。しかし、騒がしいからといって、授業内容が彼等に理解されていないかという点必ずしもそうではない。中学生の9割が半分以上学習内容を理解し、高校生でも7割5分の生徒が半分以上内容を理解している(③のア、イ、ウ)。中学から高校になるにつれ、学習の中味が難解になるのに、騒がしさは中学から高校になると増加するわけではなく、むしろかえって高校の方が減少傾向にさえあるように見うけられる(①のカ、キ)。これは中学と異なり高校では単位制で進級や卒業に影響したり、また教科の選択制が2年生より導入されているため自己の好きな教科が学習できるた

めであろうと思われる。授業の雰囲気が悪影響を及ぼしていると自覚している4%ほどの者(②のキ)に対し、騒がしさを自ら作り上げている原因を記述式で質問してみたところ、次の様な意見のものが見られた。

- ・学習内容が教科書通りであり、その時間に学習する意味を感じられない。また、あまり静かだと眠くなり多少騒がしい方が頭に中味が入りやすい。
- ・先生が授業に遅れ、けじめのない時や生徒自身がやる気を失っている時に騒ぎやすい。
- ・自分の自覚が足りず、皆につられて騒わいでしまう
- ・学習内容が理解できないので騒わいでしまう

中学から高校に進むにつれ授業内容の理解度が低下し、理解できない者の割合が増えている(③のエ、オ、カ)が、これは、選択性をとっているものの、授業内

容が中学に比べ高校になると高度化し、また学力差が大きくなる為であろう。中学と高校における理解度の相異を下にグラフ化した。



勉強の取り組みが消極的であり、授業の雰囲気が騒がしいと感じとっている生徒が約半数もいる現状では、如何にしたら授業に対し積極的に、意欲的に取り組ませることができるか、我々教師の今後の大きな研究課題となるであろう。

〔3〕遅刻・早退・欠課について

時間の観念とそれを守る自覚と実行は、秩序と規律ある集団生活を維持するための基本的な要件の一つである。日常生活が多様化する中で、中・高校生の生活リズムは、個性化の傾向を強めており、家族間においては同一・同調性が稀薄になっている傾向もあろう。このような現代的な体様に生きる中・高校生には、自力で自己の生活リズムを維持し、安定させるためのチェックアンドバランスが必要となってくる。中・高校生の生活の乱れに起因し、これを促進させる要素は、家庭・学校・一般社会を問わず、生活そのものに内在しているため、学校における生活指導が従来にも増して容易でなく、単なる対処的指導法では解決の糸口が見出せない困難さがあり、個別指導の重要性を認識しなければならない。

そこで、適切な生徒指導を確立するための手順として、生徒の生活面を時間との関係からその実態を把握することとし、生徒自身の判断・評価に委ねるアンケート方式を採用した。

1. 実施日：昭和61年2月15日
2. 対象者：中学1・2年(各学年2学級、計4学級)
高校1・2年(各学年3学級、計6学級)
3. 調査事項：1年間における欠席・遅刻・早退・欠課の有無と理由、および定時刻の守られない理由、

原 幸 宏 米 田 関 一

守るための心がけ

4. 結果：以下の表1～4に従ってコメントを加える。

表1. 1年間に「欠席」した生徒数とその理由

単位：%

学年・性別	欠席した生徒	理 由					
		けが・病 気	家庭の都合	怠け心	その他		
中 学	1 男女	57.1 66.6	61.9	96.0 88.8	0 11.2	0 0	4.0 0
	2 男女	73.3 55.8	64.7	80.0 100.0	20.0 0	0 0	0 0
高 校	1 男女	65.4 74.1	70.0	91.6 93.4	8.4 6.6	0 0	0 0
	2 男女	63.1 81.8	73.1	65.9 74.1	10.6 17.9	6.3 8.0	17.2 0

表1に関連して要約すれば、次のような特徴が指摘できる。

- ① 欠席率が高く、学年進行に応じて上昇傾向を示す。
- ② 1人当たりの欠席日数は、どの学年も「5日以内」が最も多い。
- ③ 欠席理由の大部分は、「けが・病気」である。なお、「家庭の都合」で欠席した者の中には、